
第 15 回農村計画委員会・韓国農村建築学会 日韓
交流会・シンポジウム
伝統文化・田園資源と建築・地域デザイン—金沢・
加賀、韓国からの発信—
農村計画委員会

農村計画委員会では 1996 年からほぼ毎年、韓国農村建築学会と相互交流を行っており、第 15 回日韓交流会(公開研究会)は金沢を拠点に 8 月 7 日(日)～8 月 9 日(火)の 3 日間に亘って開催された。シンポジウムは「講演・話題提供・コメント」、「実践報告とコメント」の 2 部から成り、テーマ設定・講演者コーディネートは 2016 年度農村計画委員長の山崎寿一(神戸大学)、司会は、農村計画委員会アジア農村フォーラム WG 主査の川嶋雅章(明治大学)が担当した。

シンポジウム

開催日時：2016 年 8 月 8 日(月) 14:00～17:30

会場：金沢市民芸術村(パフォーミングスクエア)

開会挨拶・趣旨説明：山崎寿一(神戸大学／農村計画委員会委員長)

はじめに、開会挨拶、企画の趣旨として以下の通りコメントがなされた。

農村計画委員会設立 50 周年、韓国農村建築学会との研究交流 15 回目の節目に歴史都市・金沢で公開研究交流会を開催できることに感謝したい。今回の公開研究交流会は農村に限定した議論の場ではなく、都市、農村を問わず地域と文化に根差した持続的な設計論・計画論を探求したいと願い企画した。参加者一同、関心を共有し、地域そして次世代に向けて本日の成果が発信されることを望む。

1 部 講演・話題提供・コメント

シンポジウム 1 部では「地域性」をテーマに掲

げ、地元金沢工業大学で教鞭を執り、金沢計画研究所で数々の作品を手掛けた水野一郎先生と神戸大学名誉教授でチーム ZOO、いるか設計集団で地域に根差した建築デザインを実践している重村力先生、韓国側からは大邱を拠点にリモデリングによる都市の再生を展開するド ヒョンハク先生の 3 名に御登壇頂き、以下の内容の講演がなされた。

地域と文化と建築

水野一郎(金沢工業大学／金沢計画研究所)

「地域と文化と建築」という題名を授かり、藝大院時代に漁村集落・外泊の実測調査を行ったところよく考えていたことを思い返すと当時、外泊集落の空間構成に機能的なものを感じ、これがインターナショナルなものであると捉えた。

金沢に拠点を移して最初に住宅の設計を依頼されたとき、雪国の気候的条件を考慮せず、住宅雑誌に掲載された住宅を例に外観、内部空間の要望が出されたことをきっかけに、金沢近郊の農村集落・久保を調査した。そこには家を雪から守るための装置である雪囲いがあることを発見した。こういった雪国のルールは都市にも存在し、雪国の建築は他の建築とは違うということを確認した。雪囲いは雪のかからない外部空間を確保することを目的とし、板や藁、塩化ビニルのように多様な素材が用いられる。コンクリートの現代建築にアルミフレームとガラスで雪囲いをデザインした結果、気候の特徴である雪をテーマに設計を進めると現代建築にも大きな変化が現れることがわかった。

鳥越村営官の森住宅団地では気候に合わせたデザインに加え、公営住宅の木造化という全く異なるテーマに挑戦した。当時、公営住宅は不燃化が定められていたが、鳥越が林業の盛んな村であったこと、地域産材の利用による維持・更新が可能であることの 2 点をもって繰り返し陳情したところ許可を頂き完成させることができた。地域産材の利

用でいうと、林業の盛んな白山麓・鶴来にできたもく遊りんがある。この例のように公共建築を木材で建てるのは地域の産業との連携の問題でもある。

金沢は伝統工芸が盛んな街であり、これをまちづくりや建築に活かさないかと考えてきた。そこで世界の漆文化、金箔文化を調査した。韓国、ブータンの漆文化、タイ、ミャンマーの金箔文化に学び、こうした伝統工芸・文化の建築への展開を考えている。

今日の会場である金沢市民芸術村は金沢市長に古い倉庫を残せないかと依頼され再利用したものである。こうした古い建物を何に使うかと考えたときに、地域の強みを強調するのが地域文化と思われがちだが、若者文化が育っていないという弱みも地域特性と認識し、若者が活躍する芸術の場にしようと決めた。

金沢駅周辺整備の一連のプロジェクトでは、市役所、県庁、新しい商業機能・業務機能が集中した旧市街で木造建築がコンクリートビルに淘汰されるのを避けるためにどうあるべきかを考え、一点集中型から軸状の都市構造への転換を決断した。次に旧市街と新市街の間に位置する金沢駅の線路を全て高架にするプロジェクトが始まり、新幹線開通に合わせて整備が行われ新しくドーム＝もてなしドームとゲート＝鼓門をつくった。駅は大体コンコースを出ると駅前には車の広場だが、金沢駅は降りるとまず人間の広場があり車の広場は最後にあるというような計画にした。人間の広場がそのまま街につながる動線とした。また金沢は日本の県庁所在地で年間雨量が最多の都市で、そこで広場に傘を差す、というコンセプトが思い浮かんだ。ここで瓦をのせるというこうもり傘と、ガラスでつくるというビニール傘とで論争がおこったものの、結局ガラス屋根が採用された。というのも金沢には古いものもあり、それを守っていくべきだが、同時に今の時代のものをつくらなければ歴史

がなくなると判断したためである。ドームのガラス屋根の雨水処理とコンコース地下室の換気塔、電気配線という設備の必要性に始まり、柱をねじったことで生まれたのが鼓門と呼ばれるゲートで、今では金沢のシンボルとなっている。

駅前整備事業では市民と行政、様々な関係者間の議論が頻繁に起こり、そのような議論は約20年間続いた。そうして市街地から新市街地へ伸びる1本の軸が通り、建築的表現の東側広場、自然的な西側広場、新しい駅舎が完成し、新幹線が到着した開業の日は金沢の都市改造が竣工した日ともいえる。そういう意味で「地域と文化と建築」はいつも繋がっていて、回答は様々である。

地域と建築の再生デザイン

ド・ヒョンハク／都炫學（嶺南大学／韓国農村建築学会総務）

まず大邱(テグ)という都市の紹介から始める。大邱も鉄道駅を境に旧市街、新市街が広がるという点では金沢と似ているかもしれない。1950年代、戦後間もない頃の大邱には韓屋と呼ばれる韓国の古い建物、日本式の建物があり、伝統建築も近代建築もあった。調査の結果現在も当時の建物が60%は残っている。地図で大邱の歴史をたどると昔は城、城壁があり、その間は格子状の敷地割であったことがわかる。それが日本からの影響で近代化が進められ結果的に昔ながらのまち、近代的な道、現代的な建物というように様々なものが混在している。

2007年に公共デザインに初めて携わったが、そのプロジェクトは城跡の東側の道である東城(トンソン)の再生であった。当時、この道を中心に歩くという市民運動が始まったが、この運動がきっかけとなり近代的なものを探すというプログラムが各地で行われるようになった。大邱での調査の結果、伝統建築、近代建築がまちに多く残されている

ことがわかった。

2012年に6人の若手建築家が集まり新しい建物のデザインを計画した。その中で市に依頼され、ある建物をリモデリングするプロジェクトを始めた。当時ほとんど使われなくなった建物のもともとの姿を推測しデザインした。また、日本人訪問センターである大邱ハルも倉庫を歴史観・アートギャラリーにリモデリングしたものである。このように老朽化した部分、外壁だけを直していく、再生の立場でデザインを考えている。

大邱の様な歴史ある都市をより良いかたちで再生する仕事において、古い建物が持つ時間の記憶を蘇らせるというのが再生だと考えている。つまり大邱の地域性をつくりだすのは大邱という都市が持つ記憶を共有することから始まるのではないか。

都市の再生のみならず、農村でも今リモデリングが話題となっている。このリモデリングを通じて韓国農村建築学会は農村が持つ重要性を共有しようと活動しており、リモデリングをテーマとしたデザインコンペ、国際コンペの開催など様々な試みを展開している。

講演に対するコメントと新たな視座の提供

重村力（神奈川大学／神戸大学名誉教授／チームZOO いるか設計集団）

水野先生からは地域と文化の関係から建築を考えることの重要性を、ド先生からは都市のストックを調査しリモデリングしていく取り組みについてお話し頂いた。両者共に都市再生という共通のテーマを持っていたと捉え、私の見方を紹介する。

建築の地域性、その建築の文脈を考えるということには色々な意味がある。1960年代、吉阪研究室でアムステルダム市庁舎コンペを経験した頃はインターナショナルスタイル、モダニズムが支配

的な時代だったが、このコンペでは屋根があり、レンガを用いることを前提としていた。その理由を吉阪先生に尋ねるとアムステルダムという街の特殊性の話がされた。アムステルダムのまち並みは煉瓦でつくられており、それを尊重しながらベルラーヘが株式取引所(1897)を、デクラークがデ・ダヘラート集合住宅(1923)をつくったようにモダニズムの先人たちもレンガで屋根のある建築をつくってきた。このコンペも周囲のレンガのまち並みに対して何を建てるかというもので、吉阪研究室として提案した。当選することはできなかったが、当選案はミラーガラスでレンガのまち並みを映すことで景観を壊さないというものだったが、その建築も結局は作られなかった。それほどアムステルダムにおいてまち並みを尊重しようという文化運動は強力だった。今振り返るとその時代はポストモダニズムの始まりともいえる。

1970年代に沖縄で仕事を始めると、水野先生の雪国の話と同じことが沖縄でも起きていることに気づいた。沖縄はまず暑い、それに台風がくるため東京と同じ建築をつくってはいけない。そこで建物のスラブの上にパーゴラを設け、それを緑で覆うことで涼しい空間をつくることを考えた。建物と前の柱の間に雨端(あまはじ)という自由空間をつくることで、強い雨が降っても中が濡れないようにした。こういった考えを応用し、建物を影で覆うという考えでつくったのが名護市庁舎である。これらは結局のところ沖縄民家がどうすれば快適であるかという考え方に基づいている。さらに気候の問題に加えて人々の行いや作法といったものが建築と関係していると考え。これが地域主義と建築の関係の1つである。

兵庫県で住宅を設計した時には、周辺のまち並みを見てここに住みたいという施主に対して地元の土を素材として使うことに加え、水野先生が話されたようにただ古い方法を使うだけでなく、現

代を取り入れることで地域の文脈を表現しようと考えた。また徳島県ではド先生が話されたように古い街並みをリモデリングし、活かしながら新しい街並みをつくろうと提案した。そこで古い蔵を壊して図書館をつくと住民の1人が言ったのをきっかけに、寧ろ壊さずにつくれるのではないかと考え設計したのが脇町図書館であった。これも水野先生の金沢市民芸術村の話と似ているが、傷んだ部分だけを壊し、残して活かす部分を支える構造をつくり、現代的要素を加えたデザインを考えた。伝統的な漆喰、瓦といった従来の素材にガラスや鉄、新しい石といった新しいものが加わり、都市のファサードにも表情が現れた。その後まち並み保存運動が進み、まちが再生していった。

ここで1つ問題を提起したい。日本の様々な建築は気候に対して快適に作られていない一方で、地球温暖化、ヒートアイランドといった問題がある。神戸市立玉津第一小学校(2005)では、ファサードの工夫で直射日光が入らず、反射光を中に入れるようにし、風の道、風の塔をつくることで風通しが良くなるようにした。長崎県の森山町立スポーツ交流館(1995)はエコロジカルで、電気を使わずとも中が涼しくなる仕掛けがある。湘南地区につくった住宅・Villa Marea(2010)ではグリルが動き、外側で断熱する。こういった仕掛け、デバイスが徐々に新しい地域のまち並みをつくる、というのも地域性の新しい考え方ではないか。

2部 参加者からの発信—実践報告とコメント

シンポジウム2部では地元金沢で活躍する建築家各氏より、1部の講演に対するコメントと実践報告として作品紹介がされた。コメント、報告は以下の内容の通りである。

建築をとおして豊かな地域を創出する 山岸敬広 (山岸建築設計事務所)

1部の講演では、水野先生からは地域文化と建築の関わり方、ド先生からはリモデリングによる都市の再生、重村先生からは問題提起として気候に対して快適であるような建築の作り方で都市の景観をつくっていくような教えを頂いた。プロフィールにあるように、私は大学院時代に水野先生の研究室で建築を勉強した。建築をつくる時に大切にしていることは「建築をとおしてゆたかないきをつくる」ということである。これには①まちとつながる建築、②緑とつながる建築、③大地から生まれる建築という3つのポイントがある。まちとつながるといのは、雁木空間・コロネードといった水野研究室で中間領域と呼んでいた領域が気候に対してどのような領域=建築と都市の間の空間をつくっていくのかを考えるということの意味する。また、金沢で建築活動をしているため、特に自然、庭と建築をどのようにつなげるかを考えている。そして先生方が文化という話をされていたように大地から生まれるというのはその土地の持つ歴史性や過去とのつながりをどう解釈して設計をするかということである。

紹介作品の1つ目は金沢市立小立野小学校で、これは住宅に囲まれた敷地にあった3階建てコンクリートの小学校を建て替える計画であった。2つの中庭を残しながら周辺の住宅と向き合うかたちで設計を進めた。昔から北陸でつくられる雁木空間を通学路にも使用している。

続いて金沢の隣町・野々市市の北陸学院扇が丘幼稚園でも園庭と建物の関係に配慮した。これも古い園舎の建て替えの計画だが、中庭に残された木を囲むように新しい園舎をつくった。エントランスを入るとすぐに桜の木が飛び込んでくるようにした。

最後に紹介するのは同じ野々市市の自邸で、これは江戸期から残る旅館の背後に新しく住宅をつくったものである。これも日本庭園と新しい家の

つながりを工夫し、エントランスを入るとリビング越しに母屋と庭が広がるように設計した。

以上、紹介したように緑・外部空間と建物をつなげる方法は様々であるが、歴史性、文化性を建築にどう反映させていくかという先生方の話を改めて解釈し今後の設計活動に活かしていきたい。

金沢における古民家再生

赤坂攻（金沢設計）

古民家再生に30年以上取り組んできたが、先生方の話を聞いて安心したことがある。私が古民家再生へと方向転換したきっかけである降幡廣信は古民家再生の第一人者であったのに対して、先生方は近代建築の最前線の方々であるが、講演をきくと地域性を重んじ温故知新の設計を心掛けていると知ったからである。

金沢の古民家は数多く取り壊されており、空き家となる古民家も数多く存在する。その理由として「暗くて寒くて不便」であることが挙げられる。またもう一つの理由として「古いものは劣っている、直せない」という偏見がある。さらに大学教育でも建築の分野で日本の文化・誇りを教えることがほとんどない。しかし、100年以上前につくられた古民家が今も多く受け継がれ、有名建築家の作品が100年も受け継がれている例が少ないことを考えると、古民家が劣っているというのは大きな間違いといえる。

私がこれまで行ってきた古民家再生は新規をなじませるといって修復とは異なる手法をとっている。まず古民家の魅力を探り現代の工法を取り入れることで新しいライフスタイルを融合させるというのが私の考える古民家再生である。

北金沢で行った農家の再生では、創建当時の一番美しい姿、原型を探ることから始まり、時代考証を基に言うならば「正しい改築」がなされた姿を想像して設計を進めた。度重なる思い付きの改築で

その魅力を失っていた古民家を再生し、洋式・椅子式のスタイルを取り入れると同時に、別の部屋では日本式の茶の間としての生活様式を取り入れ、現代的生活が営めるようにしている。

金沢の旧市街地にある明治期の町家の再生では明治期の町家を大正期の町家にアレンジすることによってプロポーションが崩れるのを避け、内部も若い施主の要望に合わせて現代的な生活が営めるよう大改造した。

次は移築再生の事例である。本来、民家を商店として移築し活用しようとしていたものが、移築を予定していた年の大雪で全壊してしまった。これに対して、建物の大きさを3分の1まで小さくし、日本の木造技術、伝統技術を受け継ぐ職人の手仕事によって元々の骨組み、組み方を再現することで移築を実現した。

最後に、哲学者・和辻哲郎の言葉を添えたい。「一国の美しさは風土に根ざす」、この言葉はまさに風土に育まれた古民家の姿といえる。思い出、歴史、文化といった過去を引き継ぎ現在、未来につなげるという新築には出せない魅力を持つのが古民家再生である。

生涯活躍の街—日本版 CCRC の実践

西川英治（五井建築研究所）

水野先生の話は色々な場面で聞くことがあるが、いつも都市の変遷について建築のデザインも含めて歴史的に継承がなされてきた金沢のまちについてお話されている。いつでもその時代毎に大きな決断がされて今の都市があるという話を聞いたことがあるが、これは例えば金沢駅の高架、もてなしドームの実現に垣間見られ、いずれも先見性ある判断をもってつくられたのだらうと思うと、都市を重ねていくには先見の明がある人物が必要であると感じている。ド先生の大邸の話からは人口規模に差はあるが、まちの作りは金沢とよく似てい

るのではないかと感じた。再生が行われている建物はかなり日本的要素を持ったデザインを持っているように思えた。それはなぜかという疑問を持つとともに一度見てみたいと思うに至った。私が学生時代に重村先生が設計された名護市庁舎が建築雑誌の表紙を飾り、モダン建築主流の当時にその流れと異なるものを目にして感動したのを思い出した。いまなお地域性を念頭に置いた建築をつくられていることに敬意を表したい。

今日は「生生活躍の街」をテーマに話をしたい。現在、日本社会は大きな問題を抱えているが、その1つが高齢化である。今 65 歳以上の人口比率は 26% となっており、将来的に人口が減る、若者が減るという問題も存在する。もう 1 つの問題は首都・東京にすべてのものが一極集中し、地方が疲弊していることである。現在、安倍首相は地方創生、そして生涯活躍できる、生きがいを持って暮らすことができる街をつくろうという政策を打ち出している。そこで日本版 CCRC の実践の話に移ると、CCRC というのは Continuing Care Retirement Community、いわゆる継続的なケアが付いたリタイア後の共同体が日本に必要なのではないか、ということとその実践を行っている。地方の問題は若者が地方に残らないことであり、石川県は今、若者が残るような施策を大学・自治体が一体となって東京の一極化を地域に戻そうという取り組みを展開している。

2 年前に完成した Share 金沢は全部で 25 棟の建物があり、その中には障がい者施設も高齢者が住まう施設もある。また一般の人が利用できる入浴施設、レストランもあり、1 つのまちとしてごちゃ混ぜになっているというのが特徴で、障がい者、高齢者を孤立させず、社会全体・まち全体で支えていくというコンセプトである。

加賀市の佛子園本部も温泉、レストランと障がい者、子どもたちの施設を一緒にしたプロジェク

トで今年 9 月に完成を予定している。ここではこの施設を中心として周りの様々な施設を結び付けて地域のコミュニティの核をつくるという構想になっている。

能登半島の先にある過疎化が進んだ地域で展開する輪島プロジェクトはまちにある 80 件近い空き家を活用し高齢者施設、障がい者施設、そして中核施設である温泉、レストランをもつまちに変えようというものである。できるだけ今あるものを残して改修することで、車が通るだけのまちになっている現状を人と人がコミュニケーションを取れるようなまちにしようといったことも含めてまちの再生に取り組んでいる。これは 2 年後に完成を予定しているため、また訪れていただきたい。

また、今回の日韓交流会は加賀・金沢・能登のエクスカージョンも併行して執り行われた。

初日 7 日は小松空港にて韓国代表団を歓迎した後、加賀市、白山市の建築と田園環境をめぐり、能登町の農家民宿・春蘭の里に宿泊した。加賀市では地域性を追求し、文化・環境を尊重した象設計集団による設計である九谷焼美術館、地域に根差した公営住宅デザインを実現した加賀市宮新川住宅(設計：瀬戸設計)を見学した。続いて白山市では高齢者社会の新しい暮らし、まち、施設の在り方に挑戦したプロジェクトを加賀・金沢・能登で展開する社会福祉法人・佛子園の本部である B's 行善寺(五井建築研究所設計)と、地域・文化を建築空間の計画・設計に取り込んだ水野一郎氏(金沢計画研究所)による、もく遊りん、獅子ワールド館をめぐった。宿泊地となった能登町・春蘭の里は豊かな自然を最大限活かしたむらづくり・むらおこしの一環として農家民宿を営む伝統的集落である。

翌日、シンポジウム当日は金沢中心部へ移動し加賀藩初代藩主・前田利家の金沢入城の経路をたどり、歴史都市・金沢の都市構造・空間を体験した。



シンポジウムの様子—講演の水野一郎先生



集合写真—シンポジウム参加者

またシンポジウム会場の金沢市民芸術村は紡績工場を改修したもので、近代化遺産・産業遺産と建築の再生・創造を示す好例である。

最終9日は金沢を代表する建築の1つである金沢21世紀美術館で設計を担当した元SANAA所員の吉村寿博氏から計画のコンセプトや空間的特徴、構造面における工夫について解説を頂いた。その後徒歩にて兼六園を回遊し、水野一郎設計の金沢城公園玉泉院丸庭園・玉泉庵を見学した。その後、金沢において江戸時代の文化と建築を現代によく伝えている伝統的町並みの1つである東茶屋街(東山ひがし伝建地区)を視察した。そして、先述の佛子園の金沢における福祉コミュニティ形成の中核施設(団地)であるShare金沢を見学し、設計者の西川英治氏(五井建築研究所長)にコンセプトであるごちゃ混ぜのまちを体現するにあたって配慮した点や計画的特徴について解説がなされた。続いて金沢の名建築の1つである村野藤吾設計の北國銀行武蔵が辻支店を見学した。最後に、最上階ホールにて地域性というテーマで日本、韓国双方の伝統文化を考慮した建築・地域デザインや地域資源活用との取り組みと現代的課題を互いに発表し合い、共有することの意義と継続的な研究交流の重要性を確認し、第15回日韓公開研究交流会は盛会のうちに終了した。



会場写真—金沢市民芸術村



加賀市宮新川住宅(瀬戸設計)



能登町・農家民宿—春蘭の里